報告 第1回医学図書館員基礎研修会

穴 道 勉*

鳥取大学附属図書館医学部分館

日程 : 平成 6 年 8 月 24 日～26 日

場所 : 大阪大学附属図書館生命科学分館

参加 : 38 名

1. 序

平成 5 年度に開催された日本医学図書館協会（以下「協会」）の総会において、協会の今後の方向の一環を示す教育方針である「医学図書館員教育大綱」が承認されて 1 年を経た。

それに基づいて本年度から医学図書館員教育委員会（以下「教育委員会」）が企画・立案した新しい三つの教育プログラムが実施されることとなった。

その一つが 7 月に広島大学医学部で開催された「継続教育コース」と「医学図書館研究会」であり、残りの一つが新人図書館員のための初任者研修の性格をもつ今回の「基礎研修会」である。

ご存じのとおりこの「基礎研修会」は従来の「医学図書館員研究集会」を改めたものである。「大綱」に沿って活動を始めた教育委員会としては、それが単なる名称の変更に留まることなく思想・内容に新しい方向をもたなければならなかった。

しかし今年度は教育委員会のスタートが遅れたため、結果的には関西地区の加盟館スタッフで構成する実行委員会に全面的に委ねることになった。会場は大阪大学生命科学分館の立派な視聴覚室で

ある。

2. 風景

メインテーマは「医学図書館の自己点検・評価」であった。

初日は三つの講義が行われた。一つは「JMLA の歴史と活動」と題し、協会の理事である近藤氏（兵庫医大）が担当した。この内容は従来の研究集会のプログラムにも必ず盛り込まれていたもので「協会とは何か」を理解してもらうのには端的な方法であろう。講義は配布資料を使って滑らかに進められた。

続いて協会の前々会長を務められた鈴木不二男先生（大阪大学歯学部教授）の「研究者と図書館とのかかわり」の講演があった。利用者は図書館をどのように評価（重要と考えているか）しているかが、新人職員にも十分に理解できたであろう。

午後は由良信道氏（横浜国大）が「学術情報システムにおける図書館相互協力」を語った。講師の得意とする分野でもあり、相互協力の定義には

* Tsutomu SHINJI : 〒683 米子市西町86.

じまり、大学図書館行政、さらにはインターネットへと話が展開した。快適なテンポの語り口に乗せられて、聴き手は図書館をめぐる情勢の厳しさを改めて認識したに違いない。相互協力のネットワークから始まった日本医学図書館協会は今や加盟館が100を越えるほどに巨大化した。その協力態勢は些かも揺るぐものではないが、学術情報センターが大学図書館を中心に医学図書館とのネットにもからんできた。今後は互いにもっている文献情報や図書館情報技術のノウハウにとどまらず人的資源の交換など協力が図られることになる。講師はそこまでを語りたかったのかもしれない。

午後から始まった自由討議は参加者を担当業務別に五つのグループ（受入、目録、雑誌、運用、相互貸借）に分けて行われた。それぞれに実行委員や、教育委員会の委員が助言者として加わる方法がとられた。時間は2日目を合わせて3時間半ほどをあてがわれた。互いにリーダーなど役割分担を取り決めたりしてスムーズに討議が行われていた。ただ助言者の介在の仕方には様々あるが、討議者よりも助言者の出しゃばりが目立つグループもあったように見受けた。自由討議の利点は未完成の図書館員がどのような斬新な考えをもち出し、それをどのようにグループの統一的な考えにまとめていくか、そのプロセスにこそ意味があるのではなかろうか。助言者はノータッチでもいけないし、まとめへの誘導は難しいのかも知れない。

2日目は「外国雑誌センター館の活動」と題して、今回の実行委員長であった山中康行氏（大阪大学生命科学分館）がセンター館の代表者として大阪大学の現状を報告した。

センター館が設置（昭和52年）されてから最早17年も経過していることに今更ながら驚いた。今回の参加者のほとんどは医学もしくは大学図書館員としての経験が浅いのでセンター館の意味も当たり前過ぎて、ひょっとしたらその存在意味も知らなかったのではなかろうか。

現在、大学図書館といえども世界の学術雑誌を物理的にも、第一予算的な制約があり無制限な購入ができるものではない。せいぜいコア・ジャーナルが精一杯である。そんな中でレア・ジャーナルを収集することの重要性、それがために集中するであろう文献複写依頼などを考慮すると、センター館の役割の重さは図り知れない。図書館の各種「統計表」に見るとおりセンター館における文献複写枚数は、ことに医学・生物学系をカバーする大阪大学のそれは極めて数字が大きい。しかもバブル崩壊の影響を受けたせいなのか（？）大学予算の伸びも期待できない今日、個々の図書館の外国雑誌負担は重くなっている。だからつまり大阪大学、すなわち外国雑誌センター館への依存度はますます高くなるばかりであろう。

講師はギヴ・アンド・ギヴのそうした現状を淡々とさりげなく語っていたが、受講者はどう受け止

めたであろうか？ 大変な労力への感謝？ であろう。

続いて日本の医療情報学における第一人者の一人である井上通敏先生（大阪大学医学部教授）が「医療情報と医学図書館」のテーマで語られた。夏風邪を召したとかで鼻をグスグスさせながらもユーモアたっぷりの話振りは聴衆を十分楽しかせるものであった。午後に見学をした「阪大病院」の医療情報（もっぱらカルテ）の処理と管理についての成果は熱っぽく誇らしいものであった。誠意があり好ましく聴けるものであった。「医療情報は図書館と相容れない」というニュアンスを講師は遠慮気味に述べていた。しかし図書館側としては今後、むしろ積極的にその情報を取り込み「医学情報」とともに処理し提供することに参加しなければならないのではなかろうか。

記念写真を終え、再びグループ別に自由討議に入った。そのあと「自由研究」の名目で午前の講師である井上先生の案内で新装なった「近代的な」阪大病院を見学した。

最終日は各グループの代表者が討議の結果をまとめて報告した。

第1グループ（受入業務）

選書はどの図書館でも「委員会」を形成するなど「教官」サイドが主導権を握っている。しかし選定者は利用者のニーズを把握している「司書」であるべきであり、そのためにも図書館員のレベル・アップが必要である、と結んだ。

第2グループ（目録業務）

機械化への不安、主任司書への不満、およびスタッフの不足が問題である。現状では利用者教育への成果が不十分であること、館員研修の必要性があるが「千里の道も一歩から」とチャレを盛り込んで見事に結んだ。

第3グループ（雑誌業務）

利用者の必要とする資料を迅速・安定的に供給

するため、予算の効果的運用を図るべきである。ここでも選択には図書館員が主導権を握るべきであると結ぶ。また今後は電子媒体やINTERNETを考慮することを加えることも忘れていない。

第4グループ（運用業務）

図書館員の資質向上、利用指導（利用者教育）、資料の管理と充実、施設をも併せて討議をした。利用者が多忙な医師である医学図書館の開館時間や利用者への対応など抱えている問題点を話し合っている。

第5グループ（相互貸借）

他の業務と異なり仕事が一つにしばられているので問題点は国立大学と私立大学との相違点など、双方の歩み寄りはいかにすべきであるかが争点となったようである。

こうした報告について教育担当理事が次のようにまとめを行った。

討議にも全ての参加者が積極的に発言をしているのが窺えた。担当委員が導いた風にも見えたが、一見バラバラに見えた内容が徐々にまとまりのあるものに形成されていくのがよくわかった。総じてプレゼンテーションは良好であった。発表のまとめも報告も上手い、といえる。

教育とは上から一方的に押しつけて効果が得られるものではない。自ら学ぶことこそ教育である。次は「継続教育コース」や「医学図書館研究会」に自主的に参加していただきたい。今図書館は機械化が進み、自分の意思・主張が抑えられ、しかも仕事が画一化される傾向にある。そんな中で自分は図書館の中でどういう位置にあるのかを見極め、決して「金太郎飴」にならないよう心すべきである、と結んだ。

3. 反省

今年のお阪は格別暑い夏であった。でも大阪大学のスタッフを中心とした実行委員会のチーム・ワークが良かったので成果は十分に挙げられたと、

確信している。一方、教育担当理事の私としてはもう少しお手伝いができれば良かったと反省している。
(教育担当理事)

実行委員(加盟館順)	
山中 康行	大阪大学附属図書館生命科学分館 (実行委員長)
近藤 輝明	兵庫医科大学図書館 (副実行委員長)
小川 晋平	滋賀医科大学附属図書館
田中 藤男	京都大学医学図書館
宮本小夜子	京都府立医科大学附属図書館 (記録担当)
平居 千明	京都府立医科大学附属図書館 (記録担当)
広井 聡	奈良県立医科大学附属図書館
宮岸 朝子	大阪大学附属図書館生命科学分館 (事務局)
水谷 幸子	大阪大学附属図書館生命科学分館 (会計担当)

第1回医学図書館員基礎研修会プログラム

テーマ：医学図書館の自己点検・評価

8月24日(水)(第1日目)

- 9:30~9:45 受付
9:45~10:00 開会式およびガイダンス
実行委員長
10:00~11:00 「JMLAの歴史と活動」
近藤輝明講師
休憩(15分間)
11:15~12:30 「研究者と図書館とのかかわり」
鈴木不二男講師

- 12:30~13:30 昼食
13:30~14:45 「学術情報システムにおける
図書館相互協力」由良信道講師
休憩(15分間)

- 15:00~17:00 自由討議
メインテーマ：医学図書館の自己点検・評価
第1グループ：受入業務
第2グループ：目録業務
第3グループ：雑誌業務
第4グループ：運用業務
第5グループ：相互貸借業務

- 17:00~20:00 懇親会

8月25日(木)(第2日目)

- 9:30~10:45 「外国雑誌センター館の活動：
大阪大学生命科学分館の現状」
山中康行講師
休憩(15分間)

- 11:00~12:15 「医療情報と医学図書館」
井上通敏講師
12:15~12:30 記念撮影
12:30~13:30 昼食
13:30~15:00 自由討議(続き)
15:15~17:00 自由研究 阪大附属病院見学
17:00 解散

8月26日(金)(第3日目)

- 9:30~10:45 「自由討議の発表」
教育担当理事
休憩(15分間)
11:00~12:15 「医学図書館における情報検索」
小川晋平講師
12:15~12:30 閉会式
見学希望者への生命科学分館案内
8月25日(木)17:30~

第1回医学図書館員基礎研修会に参加して

福岡大学図書館医学部分館
寺崎満弓

今回の研修会は「医学図書館の自己点検・評価」をメインテーマに、6名の講師による講義と五つのグループに分かれての自由討議という形式で開催されました。

自由討議のテーマは、受入、目録、雑誌、運用、相互貸借という身近な業務に関するものでしたが、多くの問題点や疑問点が出され、改めてその奥の深さを感じました。私は第1グループの「受入業務」に参加しました。図書の受入という関わったことのない分野でしたが、他大学や病院図書室の方たちの貴重な意見を聞くことができ大変勉強になりました。また、「生涯教育」や「全人教育」問題が叫ばれている今日、医学図書館員として果たすべき役割の大きさに身の引き締まる思いがいたしました。今後、今回の研修会で学んだことを業務で生かしてこそ、参加させていただいた意義があるかと思います。

最後になりましたが、講師ならびに実行委員、参加者の皆様に心よりお礼申し上げます。

川崎医科大学附属図書館
塩田恵美子

長年続けられてきた「研究集会」が、新たに「基礎研修会」と改称され、記念すべき第1回研修会に参加することは、嬉しくもあり、その反面、不安でいっぱいでした。

テーマは、「医学図書館の自己点検・評価」で、6人の講師による講演とグループ討議を中心に進められました。

講演では、JMLA（日本医学図書館協会）の歴

史と活動、組織と運営、外国雑誌センター館の活動の認識、学術情報システムにおける図書館相互協力など、医学図書館員であるからには知っておかななくてはならない基本的事項から、ネットワーク時代の中で、医学図書館における情報検索サービスについて、今、図書館員として、なすべきことは何か、等々、身の引き締まる思いで拝聴しました。

また、グループ討議では、日頃、特に問題意識をもつことなく、過ごしていた自分にとっては、自己嫌悪におちいりそうになるほどの刺激を受けました。そして、館種や規模が違うと、色々な事情があること、また、建て前ではなく実情を話し合うことができ、普段、他の図書館の方と話をする機会もなく、視野が狭くなりがちな私には、とても新鮮な感じがしました。ただ、欲をいえば、前回までの合宿形式と違い、各自がそれぞれのホテルへ帰るため、発表のまとめ作業において、時間が限られ苦しい思いをしたので、もう少し討議のための時間が欲しいと感じました。

研修会を終えてから、図書館そのものの日常業務について、今までと少し見方が変わってきたように思います。価値観がどんどん変わる時代にあって、図書館を新しい視点から眺めて見ることは必要であるし、面白いことです。また、医学研究者は、常に最新の情報を求めているので、利用者のニーズに応えるため、従来にも増して、図書館員がレベルアップしなければならないことを強く痛感しました。

最後に、この記念すべき基礎研修会に参加させていただき、深く感謝いたします。

東海大学附属図書館伊勢原分館

種 田 環

館員になったばかりの私にとって“医学図書館”という世界は五里霧中どころか万里霧中で1年半たった今、やっと五里霧中にたどりつけたという感じです。

今回の研修会は医学図書館員として多く学ぶこともあり、また他の図書館の情報（内情！）も聞けるのではという期待の半面、私のような知識の乏しい館員がはたして講義の内容を理解できるだろうか、グループ討議で発言できるだろうかと不安な気持ちもありました。

多くの講義はどれも今後の医学図書館にとってとても興味深い内容でした。聴講している中で私は医療における医学図書館の重要性、そしてそれを支える図書館員の役割の重大さを改めて認識せずにはいられませんでした。

グループ討議では運用業務の立場からテーマの「医学図書館の自己点検・評価」について討議しました。グループ各館の問題点を挙げることから始まり、医学図書館員として何をすべきかということに発展してゆきました。グループの中には大学図書館だけでなく、病院図書館、製薬会社の図書館があり、機関によって規模や利用対象者が違い、それによって抱えている問題も微妙に違うことを知り、今まで知らなかった医学図書館を発見することができました。しかし抱えている問題は違ってもそれをどのように解決してゆくか、また普通の（公共の）図書館と異なる点で自分達はどのように対処すればよいのか等、私がこれまでに考えていたことと同様なことを知りました。五里霧中で利用者と接しているのは私だけではないと思ひ安心するとともに医学図書館員の一人としてこれらの問題に今後も取り組んでゆきたいと思いました。

今回の研修会では講義、グループ討議、休憩時間の談話を通じて医学図書館について、多くのこ

とを感じ、考えさせられました。今後の私にとって戒めや励みになることと思います。最後になりましたが、講師の先生ならび関係者の皆様に深くお礼を申し上げます。そして参加者の皆様方、また何かの会合でお会いする日を楽しみにしています。

明海大学歯学部図書館

村 山 薫

昨年までの「医学図書館員研究集会」が、本年度から名称も新たに「医学図書館員基礎研修会」となって開催され、その記念すべき第一回に参加させていただいたことを心より嬉しく思います。

図書館勤務二年目の、社会人としてもまだまだ新米の私にとっては、これが初めての本格的な研修会です。普段あまり接することのないほかの図書館員が何を考え、そして日々どのように働いているかということには大変興味がありました。

多少の不安と好奇心と共に研修会の幕は開け、講師の方々による連日の講義、真新しい病院・図書館の見学など、非常に充実した三日間を送ることができました。グループに分かれての自由討議においては、日頃からそれぞれが感じていること、考えていることなどを率直に話し合い、知ることができました。しかし、討議に充てられたのが短時間であったため、各図書館の現状、問題点等活発な意見交換はなされたものの、最終日のグループ発表では、漠然とした理想論に終始せざるをえなかったような気がします。

改めて医学図書館、医学図書館員としての自己を見つめ直すということは、時間に追われる日常業務の中ではつい忘れがちです。私自身この研修会で多くのことを学び得たことで、日々医学図書館員としての自覚と勉強の積み重ねが大切であるという思いを強く感じました。

最後になりましたが、講師ならびに実行委員、

大阪大学の皆様に深くお礼申し上げます。

神戸労災病院図書室
井 川 美 幸

新体制となつての第1回研修会に近畿図書館協議会より参加の話をいただき参加しました。

何もかも目新しいことなので毎日が驚きと戸惑いでした。実務歴4年ですが、何一つとして身についていませんし、また、兼任業務ですので専門でもありません。しかし、今直面している問題の解決策が自分なりに見つけることができた3日間でした。

各講義の内容も濃く情報社会に対応できる人材の育成と、迅速、正確に利用者の要求に応えていかなければならないこと、また、バランスのとれた蔵書構築が必要となることを学びました。

病院図書室の役割を考えるに医者、看護婦、パラメディカル、事務員に日々目まぐるしく変化する医療情報を迅速に提供する要として病院自身の意識改善が大事だと思います。それには、図書館としての内容充実と図書館員のレベル向上も大きな要因となると思います。

“研究者と図書館とのかかわり”の中で鈴木先生が“研究者は一体どんな情報を求めているのかを図書館員は察知し把握しなければならない、情報管理に変化する。”と指導されて、次にスライドで各国の大学図書館の内容を紹介され目から鱗が落ちる思いでスライドを見ました。スライドを通して各国が図書館を重要文化を扱うように大事にし蓄積している資料・情報を我が大学の誇りとしているこの精神が文化を支えているのだと思います。

情報とは生きているもの、文化を護り育てるところには発展と成長があると思います。次に各五つの研究グループに分かれ私のグループは受入業務について8人のメンバーで討議を行いました。

業務経験も違う各大学、施設図書館の現状を紹介、それに対しての質問会となり多くの問題点が出されましたが、最後には受入業務で一番の課題は「選書」になるのではないかと結果が出ました。選書・購入の問題は“何を”基準に購入するのか苦しむ課題です。大半は医師および一部の管理者による決定が多く“これで本当に良いのか？意見が反映されているのか？”との問題点があげられ現場のニーズに応えるように研鑽が必要とされ選書は図書館員が行うことを前提として、1. 選書基準を作る、2. 書評を読み研鑽するとの2点が指摘され、偏りのない蔵書構築を目指さなければいけないとの意見で一致しました。

今回の研修会は私に理解できるだろうか？という不安と戸惑いがありましたが、すぐにとけこめ全国からの参加の意欲に頭が下がりました。全国の方から色々教えていただき有意義に学びました。日々の仕事に追われ情性に流されていましたが、視野も広げることができ勉強になりました。

また、大学図書館と病院図書館との交流をさらに深めお互いのプラス面を吸収して現場に活かしてネットワークを拡大できればと思っています。このような研究会、勉強会の機会が多くあれば図書館員として勉強もでき知識を広めレベルアップにつながると思います。研修会の様子をうまく伝えることができず申し訳ありませんでした。

最後にご指導いただきました講師の先生ならびに実行委員会の方々、生命科学図書館の方々にこの場をお借りしてお礼申し上げます。

ありがとうございました。

東京大学医学図書館
大 山 努

私が、この研修会参加にあたって最も期待したことは、普段接することのできない他の図書館の職員の方々との交流でした。日頃疑問に思ってい

ることや、今一つ自信のもてないことを、同じような立場の人たちと話し合うことによって解決できれぽと思ったからです。

この点については期待以上のものが得られました。特に自由討議では、業務ごとのグループに分けられていたため、初対面ながら共通の問題について多くの意見を出し合うことができました。

私たち相互貸借グループの討議で特に印象に残ったのは、複写依頼の際のモラル、マナーについてでした。程度の差はあるにしろ、件数の多い場合や急ぎの時など、どこまでが常識の範囲なのかという判断に気を遣うというのが、全員の意見でした。現在のシステムでは、どうしても相手館に対する負担が気になりますが、それによってこの制

度が停滞するのは避けなければならないと感じました。

残念ながら、“医学図書館の自己点検・評価”というテーマではまとまりませんでした。普段ILLの画面や相貸用紙の向こう側にいる方達と直接話し合えたことは、非常に有意義でした。

また、研修の大半を占めた講義では、相互協力や、情報検索という面を通して、今後の図書館の方向性、存在意義をあらためて考えさせられました。日常業務においても、このようなことを念頭に置いて取り組んでいきたいと思います。

最後になりましたが、このような場を用意してくださった実行委員、ならびに講師の方々、大変ありがとうございました。